

12月4日(日)、町中央公民館において「人権フェスタ」が3年ぶりに開催されました。田中恵さん、中村米子さんによる美しい演奏で幕開けし、「人権のうた」つながる」など3曲が披露され、来場者は聞き入っている様子でした。

開会行事として、小学生を対象に募集した人権作文と、中学生を対象に募集した人権標語の表彰式がおこなわれました。人権作文の部で表彰された野方小学校5年竹下元就さんと同校6年倉富玲さんが受賞作品を朗読し、その素晴らしい内容に、会場からは大きな拍手が沸き起こりました。

講演会では、紫原幼稚園園長の花月敏郎さんを講師に迎え、テーマ「あなたをそして私を大切にすること」について講演がおこなわれました。受講者からは「人権について分かりやすく話していただき、心に訴えるものがありました」など、聞いてよかったという意見を多くいただきました。人権フェスタについては来年度以降も開催していく予定ですので、ぜひご参加いただき、ご自身の身近にある人権問題について一緒に考えてみませんか。



人権フェスタ2022

「誰か」のことじゃない。

人権作文

最優秀賞
(二点)

命の尊さ

野方小学校 五年
竹下元就

それは、ご先祖様が帰ってきているお盆の日の出来事だった。

最近、ぼくの家にすごく弱った野良ねこが時々来る。やせ細り、病気がかかっているような顔をしている。ぼくが近づくと、いつもぼくに寄ってきてくれる。かわいいねこだった。だからぼくは、そのねこが来るといつも、水をあげていた。水をもらったねこは、少し元気になった様子で、いつのまにかどこかへ消えていく。そんな日々が二週間ほど続いた日だった。

その日、ぼくはあのねこが、車庫の車の下で横になってるのに気付いた。昼の日差しで、今まで以上に動くのがきつそうだった。声をかけても、顔を少しあげるだけで全く動こうとしない。ぼくが、いつものように水をあげると、顔だけあげてごくごく飲んで

た。けれど、やっぱりいつもと様子が違う。「暑くて動けないのかな」と心配で、しばらく見てみると、ねこはそのまま眠ってしまった。

夕方、そのねこがまだいたので、声をかけると、かすかに呼吸をしているのが分かった。しかし、見ているうちに、みるみる呼吸が弱くなり、ついには呼吸が止まってしまった。目の前で、命が尽きる姿を見たのは初めてだった。ぼくは、すぐにおどろいたし、それ以上に言葉では言い表せないぐらい悲しい気持ちになった。

「もっと涼しいところで暮らせていたら。」
「もっとご飯が食べられていたら。」
いろいろな考えが頭の中をよぎった。

テレビでも時々、貧乏で食事すらまともに食べられず、学校にも通えない子どもたちを見ることもある。ぼくは、やせ細ったねこの死を目の当たりにして、そのテレビの子どもたちを思い出した。
ぼくたちは、当たり前のように学校に通う。おいしいものをおなかいっぱい食べて、時

には好ききらいをして残すこともある。屋根のある暖かい部屋で、ふかふかの布団に包まれて眠っている、大好きなサッカーをして、必要なものは何でも買ってもらえる。ぼくにとっては当たり前のことが、当たり前前にはできない人にもいるのだよな、とねこの死を前に、改めて考えさせられた。

世の中の全ての人が、安定した衣食住をもち、健康で楽しく過ごせる毎日が来れば、いいのと思う。そうすれば、ねこやテレビで見た子どもたちのように苦しい思いをする人がいなくなるのに。

ぼくは、目の前で命を失ったねこの体をきれいに拭いて、家の庭に埋めた。家には、去年亡くなったぼくの愛犬チョコが、お盆で帰ってきてるはずだ。だから、チョコに「連れて行ってあげてね。」とお願した。
尊い命全てが、大切に守られる世の中になることを強く願う。

